



読書活動への扉を開く！

No. R6-13

桑村小学校 令和6年11月20日 文責：関口 直

感性と主体性を育む教育をめざす意味とは？

11月17日に行われた兵庫県知事選で、失職して出直し選に臨んだ前知事が当選しました。前知事は自身のパワハラ疑惑などを指摘する内部告発への対応をめぐり、県議会で不信任決議を可決されて失職。出直しとなった選挙戦では、自身の対応の正当性を主張していました。この選挙結果を巡って様々な報道がなされています。一度失職した知事が当選を果たした背景として、SNSによる影響が大きかったと言われていています。公正な選挙によって兵庫県民から選ばれた知事であるので、他県の間人がとやかく言うことではありませんが、一体何が起きていたのかという疑問は残ります。もし、言われているようにSNSによる影響が大きかったとすると、新聞などで報道されていることより、SNSを信じる人の方が多かったということになりそうです。

しかし、これは決して特別なことではありません。私たちは飲食店を探するとき、商品を買うときなどSNSの情報を参考にします。なぜなら、飲食店や企業などが出す広告は、いいところしか知らせず、実際にどうなのかは、利用してみた人、食べてみた人の意見が一番信用できると思っているからです。そしてさらに口コミで多くの人が支持していれば、それは真実だと判断できます。

これが政治の場合はどうでしょうか？今問われているのは、兵庫県民からすると大手マスコミによる報道は本当に信用できるのか、もし信用できないなら、何を信用して知事を選べばいいのかということです。これって民主主義の根幹に関わるかなり重要な問題です。

マスコミが信用できない状況と聞いて思い浮かべるのは、戦時中の大本営による発表です。マスコミは、そこからの情報をそのまま国民に流し続けました。その結果、何が起きたのか。歴史が証明しています。もし、戦時中にSNSがあったら、戦争推進の大きな流れは変わっていたかもしれません。と考えると、今回のことは、民主主義を正常に機能させるために重要な意味を示していると言えるのかもしれません。でも、どうしてもそんな捉え方ができない自分もいます。裏を返せば、一部の怪しい情報によって大きく政治を変えることもできてしまうということですから。

教職員は、昔から平和教育を大切にしてきました。もちろん憲法の三大原則の一つであるからですが、実は、戦時中、多くの子供たちを戦場に送ることによって戦争に加担していたのではないかとこの反省があるからです。若い頃、「西部戦線異状なし」という映画を見ました。ご存知の方も多いかと思いますが、その中で、愛国心を煽る教育が行われ、国のために多くの若者が意気揚々と戦場に向かいました。しかし、戦場で彼らが見たものは、教師から教わってきた軍人の勇ましい姿ではありませんでした。この映画を思い出す度に、自分は教師として子供たちに何を伝えていけばいいのかと考えさせられます。「戦争はよくない」「人の命は大切である」といったことは誰でも言えることです。しかし、戦時中の日本国民だって、ナチスドイツ下の民衆だって、みんな同じことを思っていたはずで。それでも、多くの犠牲者が出てしまったことは、まぎれもない事実です。

では、どうすればいいのか。メディアによる情報との向き合い方については、教師自身も子供と一緒に問い続けていかななくてはなりません。その上で、桑村小がめざしている感性や主体性を育む教育は一つの方向性を示していると思います。読解力と想像力を育む読書活動、他をいたわる心や創造力を育む体験活動、この2つを両輪として進めていくことは、主権者として次世代を担う子供たちにとって大きな意味があると考えています。